

### か 限りなく 良知を照らす 「徳本堂」

藤樹先生が亡くなられても、先生の偉大な学徳と良知に生きられた生涯は、長く藤樹書院とともに受け継がれ、その教えは今もお生き続けている。光格天皇が先生の遺徳を称えて、藤樹書院に対し「徳本堂」という号を下された。(一七九七年 寛政九年)



### よ よく見せて 枕をはずす 病の床

藤樹先生が亡くなられたのは、慶安元年(一六四八年)八月二十五日である。この日の朝、様子を見に来られたお母さんを心配させないようにと、ぜん息の身には辛いのに、重ねた枕を一つはずし、低くして見せ「今朝はだいぶ良いようです」と言われた。お母さんはそれを聞くと安

心して部屋を出て行かれた。しかし、それからまもなく先生は息を引き取られた。四十一歳の若さであった。



### た 称え合い みんなで仰ぐ 藤社

大正十一年、高島郡内の人たちが県内外の志ある人々と力を合わせ、心を一つにして郷土の偉人、藤樹先生を神として祀り、長く先生の徳を称え、仰ぐため、壮大な神社を建てるといふ事業を成し遂げた。例祭は毎年九月二十五日に行われている。



### れ 礼儀作法 小さい時から 心がけ

藤樹先生は、子どもころから礼儀正しく、落ち着きがあり、挨拶もしつかりされていたと伝えられている。



### そ そばやの看板 練習した 字は 箱一杯

ある日、そばやの主人が藤樹先生を訪ね、看板の文字を書いてくださいと頼み、先生は快く承諾した。数日後、出来上がった看板を主人は持ち帰り、店に飾った。ところがしばらくして加賀の殿様がそば屋に立ち寄り、見事に書かれた看板を一目見て「譲ってほしい」と言われた。主人は看板を譲り、たくさんの礼金をもらった。そこで、もう一枚書いてもらおうと頼みに行くと、先生は半びつ一箱に一杯入った看板の文字の

下書きを見せられた。そばやの主人は、たった一枚のために、先生がどれほど心をこめて練習をされていたかを知り、簡単に手放したことを、先生にお詫びした。



### つ 積み上げた 徳は故郷で 花開く

良知を磨き、行いを正しくすることにとめられた藤樹先生の徳は、ますます高まり、小川村を中心に多くの人々の間にその感化や教えが広まっていった。

